

Title	父と満洲と私たち：「洪熙の残照」の連載を終えて
Sub Title	父亲、满洲与我们：写于《洪熙的残照》连载结束之际 My father, Manchuria and ourselves：completing the serial Afterglow in Hong Xi Street
Author	奥村, 武彦(Okumura, Takehiko)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2024
Jtitle	満洲の記憶 No.10 (2024. 12) ,p.110- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20241200-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

父と満洲と私たち

—「洪熙の残照」の連載を終えて—

奥村 武彦

あの時代に生きた父と私たちを振り返ると、1932 年神戸高商を卒業した父は、彦根で代々営まれてきた陶磁器小売卸商「まからずや」を継ぐことなく都会に就職するつもりであった。しかし、当時は「大学は出たけれど——」と言われた就職難、やむなく（だろうと思われるが）家業を継いだ。1936 年に高商時代の下宿先の娘であった母と結婚し、翌 1937 年に姉が生まれた。1938 年に満鉄系の南満洲瓦斯に入社し、大連に渡った。そして、1940 年に私が奉天で生まれ、1942 年には妹が大連で生まれた。

1938 年に満洲大連に渡り、終戦後 1946 年の大混乱の中、日本に帰国する迄のあしかけ 9 年間、姉が一時期新京の小学校に通ってただけで、私と妹は未だ 6 才にも満たない子供で、その間の記憶は決して線では繋がらない、点でしか浮かんでこない記憶ではあるけれど、それは強烈な色彩と音を伴い、極端に言うとその場の匂いまでもが消えない記憶として残っているのです。

大連は大通りの両側にアカシアの並木があって、季節になると白い花が咲き乱れ、なんとも言えない甘い香りが漂います。その香りの中、ずうっと続く大通りを母が姉と私の手を繋いで歩いたのが昨日の様に思いだされます。その母は 1920 年生まれですから、大連で妹を生んだ時は 22 才、3 人の子供

の母になりました。大連には「星が浦」という有名な海水浴場があって、シーズンになると海水浴を楽しむ人たちが大層にぎわいました。その海岸を母が沖に向かってどんどん泳いで行ってその内、姿が見えなくなったのを心細く眺めていたのを覚えています。コロナ禍が始まる前の2019年10月、会社の同僚で満洲生まれの仲間たちと旧満洲、現在の中国東北部を旅行しましたが、最初の訪問地、大連の星が浦海岸の浜辺に立って沖を眺めた時、亡き母が沖に向かってどんどん泳いでいく姿が見えるかのような気がして暫く立ちすくんだものです。

奉天での何年かは私もまだ2、3才ですから殆んど記憶はないのですが、母と買い物に行った市場ではぐれてしまい、人込みの中、大泣きしながら探し回ったのを昨日の出来事のように鮮明に覚えています。未だにその時の恐怖感が甦るほどです。

奉天から再び大連での勤務を経て1944年、父は新京勤務になり私たちは新京に移りました。新京の社宅は大きな庭付きの邸宅でそこには野ウサギがいつもびょんびょんと飛び跳ねていました。ある日、庭のあちこちに小さな黒いものが沢山転がっていたのを拾い集めて持ち帰り、妹と2人で部屋中にばらまいて父に大笑いされたことがあります。ウサギの糞でした。たまたま社宅のお隣り、垣根越しの邸宅に当時の満洲映画の小暮実千代さんが住んでおられて、我々の家にもよく遊びに来られていましたが、このウサギの糞事件には大笑いされ子供ながらに恥ずかしい思いをしたものです。

1945年、新京で終戦を迎えることになりましたが、それから翌1946年の9月に日本に引揚げることになった新京での日々は私たち子供にとっても辛く重い日々でした。父が一時期、中国当局に囚われの身となり、何が起きているのかよくは分からないものの、母に連れられて牢屋までお弁当の差し入れに（二重底の下に煙草を入れて）行きました。後日、許されて帰宅したものの牢獄で体中しらみにやられ発疹チフスを発症、何日もうなりながら床に就き、子供心に父はこのままいなくなるのかなと不安になったものです。このまま父がいなくなりでもしたらと母はそれこそつらい大変な思いをしたこと

でしょう。

戦後の大混乱の中、新京から無蓋の貨物列車に乗り葫蘆島から佐世保に引揚げましたがこの時、父は 39 才、母は 26 才、3 人の子供を連れて、文字どおり着の身着のままの満洲逃避行でしたが、両親が元気に守ってくれたから無事に日本の地を踏むことが出来ました。

父は根っからの商売人ではなかったのではないかなと思ったりもします。神戸高商を卒業しながら彦根で商売を継がねばならなかった一時期を経た後の満洲での足かけ 9 年のサラリーマン生活は父にとってどういう位置づけだったのだろうとよく思いました。日本に帰国した父は家業を継がないで都会に出て就職するつもりだったようですが、父の父（私の祖父）が帰国後直ぐに病気になりそのまま亡くなってしまった為、やむを得ず家業を継ぐことになりましたが、実際にどんな思いで継いだのか遂に知ることはありませんでした。

私は何度も両親に満洲旅行を薦めたり、誘ったりしましたが、父は決して行きたがりませんでした。何故か、深く理由を聞くことはなかったですが、父にとっての満洲での 9 年間は彼の 87 年の人生における全く異次元の、ある意味「夢」の期間だったのかなと思ったりもします。父から私にも妹にも家業を継いで欲しいとの話は一切ありませんでした。



筆者と父（1958年4月13日、彦根城外堀にて）

註：左は筆者、右は父。筆者所蔵



筆者と両親

註：左は筆者、中央は父、右は母。1963年か1964年に撮影。筆者所蔵